

## 支え合う社会をつくる

グループホームを舞台にし、一昨年カンヌ映画祭でグランプリを取った映画『殯の森』の河瀬直美監督は「自分の身の回りで起きていることを描こうとしたら、それが認知症だった」とインタビュで述べている。この言葉はまさに今後の超高齢社会の日常を適確に表現しているだろう。約20%の高齢化率が、30年後には約33%になると予測される。この本格的な高齢化への対応は、中高年世代はもちろんのこと、これから社会を担っていく若者、さらには次世代にとって重要な課題だと考えられる。

こうした社会的背景のもと相愛大学創立一二〇周年事業の一環として、二〇〇八年十一月一日（土）午後一時三〇分から、相愛学園本町学舎講堂で記念シンポジウム「高齢社会をどう生きる」が開催された。前半は諏訪中央病院名誉院長の鎌田實氏を迎え、「健康で長生きのコツ教えます」というテーマで講演が行われ、午後三時一〇分から「四時四十五分にかけて「支え合う社会をつくる」と題し高齢化に伴う日米の現状、市民の活動などについてのパネル・ディスカッションが行われた。一階席がほぼ満員という盛況の中、パネリストとして、釈徹宗氏（兵庫大学准教授）、ロナルド・ユキオ・ナカソネ氏（スタンフ

ォード大学老人学教育センター教授）、川上正子氏（特定非営利活動法人「介護保険市民オンブズマン機構大阪」理事）、篠崎敦子氏（㈱日本消費生活アドバイザー・コンサルティング協会西日本支部「高齢社会を考える会」代表）の四氏を迎え開催された。それぞれ準備されたスライドが映し出され、高齢社会の現状、展望が示された。

このパネル・ディスカッションには二つの趣旨がある。ひとつはタイトルにあるように、これからの超高齢社会を控え、「支え合う社会」を一体どのようにつくっていくのかという点である。この課題に対しては個人的努力だけでは十分ではなく、社会に新たな仕組みを設計していくという作業が必要である。そのため今回のパネル・ディスカッションでは、とりわけ現場で個性的な実践に取り組まれている方々に報告をお願いした。もうひとつは、今後の社会における市民参加の行方である。高齢化はこれまで家族と行政の課題だと考えられがちであった。だが家族規模の縮小、財政の逼迫などによって、そのような考え方に限界が生じていることは明らかである。それゆえ、企業やNPOなど民間の活動が社会的に期待されてもいる。この動向は消極的な意味だけでなく、積極的な意味を持つ。すなわち、それは自らが自ら

藤谷忠昭



の社会をデザインし、つくり上げていくという今後の社会の在り方を示しているのではないだろうか。そこで今回のパネル・ディスカッションでは、市民の立場でご活躍のお二方をパネリストに招き報告をお願いした。

以下では、このパネル・ディスカッションのコーディネーターとして四氏の報告を紹介しながら、私自身の感想をまとめていきたい。

## 【第一報告】 地域に支えられる「里家」

まず兵庫大学准教授の釈徹宗氏から、「如来寺」の住職を務める傍ら大阪府池田市で友人と経営する「むつみ庵」という認知症のグループホームの実践について報告があった。広い庭がある古い民家を使い、「里家」をコンセプトにし「生まれ育った家ではないけれど、自分の家のようなところを」と考えて作った施設だという。スタッフも地域の人がばかりで、始めた時は全員が素人の状態だったらしい。家族にとっては、身内を施設に入れたというのは心理的負担があるものだが、高齢者が普通に田舎の家に住んでいる感じがして心理的抵抗が少なく、とても喜んでもらっているということであった。こうした経験に基づいて、単立の民家改修型のグループホームがこれからはもっと増えて欲しいという見解が示された。

高齢者施設は病院のような雰囲気のところが多く、少しずつ生活感を持たせようと工夫が凝らされてきているが、いまだ釈氏が運営するようなところは少ない。実際、夏に伺ったとき、これが高齢者施設かというほど家庭的で落ち着いた雰囲気が漂っていた。行政との折衝

など難しい点も多いという話であったが、「むつみ庵」自体の発展と、今後、こうしたスタイルの施設が増えることが期待される。

## 【第二報告】介護のパラダイム・シフト

次にスタンフォード大学老人学教育センター教授であるロナルド・ユキオ・ナカソネ氏から、アメリカ合衆国における高齢化の現状と課題について報告された。ナカソネ氏は「老化は病気ではなく、自然な体験過程である」と主張する。この考え方に基づき、アメリカ合衆国での老人介護においてパラダイムシフトが進行中だという。なかでも最も成功したのは一九八〇年代中頃に実現した「包括的老人ケアプログラム」(通称PACE)であるとの話であった。その特徴は在宅のまま包括的医療や介護サービスを受けられることで、施設に入居しているのは極度に衰弱した人や認知症の高齢者に限られるという。このようなパラダイム・シフトをするためには施設を変えるなどいろいろな課題はあるものの、この流れを社会にとって大きな機会と考えていかなければならないという見解が提示された。

在宅への動きがあるというこの論点は、介護がどちらかというと施設化へ向かういまの日本社会との対比で、たいへん興味深いと感じた。報告で話してもらった余裕はなかったが、打ち合わせでは多民族社会での施設介護の大変さについての話も聞いた。こうした点も今後、日本社会が学んでいかなければならない重要な課題ではなからうか。

## 【第三報告】新しいモデル、市民オンブズマン

介護保険市民オンブズマン機構大阪・理事である川上正子氏からは、自らが実践する市民オンブズマン活動の歴史的経緯や、役割、また具体的な活動内容などについて報告があった。介護保険制度が誕生した二〇〇〇年に、この機構も誕生した。活動する市民オンブズマンは、介護施設で暮らす高齢者と施設の「橋渡し」をボランティアで行い、「自立支援」「安全」「尊厳」が守られているかどうかを見守る役割を持っているという。現在84人が、2人1組で月に2回特別養護老人ホームで活動している。最初は警戒されることもあるが、何度も通ううちに話のできない入居者が静かにうなずいてくれるなど、市民オンブズマン自身が元気をもち、もうことも多いということであった。こうした経験を元に、オンブズマンを受け入れてくれる施設がもっと増えることを望んでいるという見解が示された。

施設評価というと高慢なイメージも付きまとうが、「橋渡し」という点にこの活動の特徴はあるだろう。まだまだ施設からの誤解もあるということであったが、各種の報道に加え、自分の家族が、あるいは自分自身が施設に入ったときの不安を考えれば、こうした市民活動が全国的に今後さらに活発化することが期待される。

## 【第四報告】仲間の和は、支え合いの輪

最後に「高齢社会を考える会」代表である篠崎敦子氏から、元気な高齢者の暮らし方についての報告があった。高齢について考え始めた

原点は、一九九二年のスウェーデンの施設訪問にあるという。80歳代の認知症の女性が毎朝自分の着たい服を選んでいるのに驚き、人間らしく生きる大切さを痛感したということであった。活動の中で関わった、元気な高齢者の支え合いの例が二つ紹介された。ひとつは電子メールで話題や情報を出し合う「メーリングリスト」による仲間づくりである。その交信で勇気づけられている人がたくさんいるという話であった。もうひとつは「サロン」の開催を中心とした仲間づくりである。地域の人が集まり、おしゃべりをしたり、お茶を飲んだりする。こういう日常的な付き合いによって仲間ができれば、自然に支え合いの輪が広がっていくのではないかと主張された。

当然ながら自立している高齢者は多い。そのことを案外、われわれは見逃しがちかもしれない。介護についての熟考が重要であることに変わりはないが、一方で元気な高齢者についての社会的仕組みをめぐる考察が今後、重要な論点になってくると思われる。今回の報告では割愛されたが、ネット上でのコミュニケーションにおけるリスクや、サロン自体の高齢化などの懸案もあるようで、これらの課題とともに、これからの動向が気になるところである。

このあとフロアから質問をお願いした。時間の関係もあり、発言は三人に限られた。うち一件は実際に高齢者施設を利用した経験から、市民オンブズマンの活動に期待するというコメントであった。また一件は、ケアマネージャーをしているという出席者から、現場の努力を知らないのではないかと市民オンブズマンの活動に対する疑義が提示された。もう一件は「むつみ庵」の具体的な場所についての質問が出

された。それぞれのコメント、質問に対し、該当のパネリストから回答を頂戴した。

要約したい詳細な差異が存在するものの、今回のパネル・ディスカッションでの四氏の報告は、敢えて言うならば老いを人間らしくという点で共通していた。さまざまな課題はあるものの、みんなで明るく元気な社会をつくり上げていくのが望ましいことはいうまでもない。ただ、そのためにより若い世代が高齢者をサポートするというだけではなく、高齢世代も含めそれぞれの世代がそれぞれの世代を支え合う、そういう社会でなければならないと考えられる。

催し自体の課題もいくつか残った。講演と内容がずれていたため二つの催しの整合性が十分に保てたかどうか疑問が残るところであるし、時間の制約のため準備していたパネリスト同士の質疑が実施できなかった。またフロアからの質問が一人のパネリストに偏るなど、反省すべき点は多い。ただ、催しの後にもパネリストを中心としていくつもの新たな出会いや再会の風景が見受けられ、そこに今回の開催の意義のひとつを見出すことができた。パネル・ディスカッションの内容はもちろんのこと、こうした出会いや再会が、来場者の今後の人生における契機のひとつに少しでもなっていればと願うばかりある。